

第5章 修学旅行等の誘致のための提案

過年度調査で提示された修学旅行等を通じた参加・体験型プログラムの利用活性化の基本的方向性について、今年度調査で実施した旅行代理店アンケート・ヒアリング、学校への直接訪問、モニターツアーなどによる検証を踏まえ、今後の北方領土隣接地域への修学旅行等の誘致のための提案は以下のとおり。

5-1 今後の誘致活動の具体的方法

5-1-1 学校の選定

誘致対象は、まずは費用面で当該地への来訪が可能か否かが、初期段階での判断基準となる。特に道外の公立学校は、各都府県の修学旅行規定の制約があるため、費用面から対象外になる可能性が高い。こうしたことから、新たな学校の発掘という面からは、私立学校を中心におき誘致対象を選定することが効率的であると考ええる。

また、第4章で整理したように、北方領土隣接地域を中心に修学旅行を組み立てる場合、詳細にローテーション等を検討する必要があるものの、様々な地域や施設を概観する限りにおいては、概ね2~3クラス程度が現段階での現実的な受け入れ規模であると考ええる。このため、誘致対象について、小規模な学校、または修学旅行の渡航方面を分離して実施している実績がある学校を絞り込むことにより、より来訪可能性が高い学校が選定できるものと考ええる。

参考：学校訪問のアポイント方法

今回の調査で実施した学校への直接訪問についての留意点を以下に示す。今後の誘致活動は当該地域自治体職員や観光セクションが中心となって実施することになるが、以下を留意することで、効率的な無駄のない誘致活動が可能となると考える。

訪問時期 : 修学旅行の行き先の検討を具体的に始め始める2月前半~3月下旬までが効果的。可能であれば、前年の11月~12月にかけて訪問し、事前に感触等を確認することが望ましい。

対象者 : アポイントを取る時期によるが、直近(概ね2年先)の修学旅行先を選定する担当教師は未定の場合が多いため、教頭先生もしくは校長先生に電話をし、本人または担当の先生を紹介していただく

時間帯 : 本調査においては、午前中の方が在校の場合が多かった

準備する資料 : 電話のみでは意図が伝わらないことが多く、また、依頼状・趣旨を説明した資料の送付を希望される場合もあった。このため、そうした資料(FAXで送付可能な分量)を準備しておくことが望ましい。

アポ~訪問 : 学校教諭は多忙であり、先の予定を確定することが難しい面がある。可能であれば、アポイントから1週間程度先に訪問する時間感覚が望ましい。

5-1-2 旅行代理店との連携

第3章で整理したように、必ずしも旅行代理店の当該地域に対する知見や知識は高くない面がある。旅行代理店のニーズとしては、北方領土隣接地域の周辺自治体も含む現実的な行程例の提示（釧路空港や女満別空港利用の場合、他自治体での宿泊も含む場合など）、費用、現実的な収容人数、各施設等での自治体等の支援の有無と内容などがある。旅行代理店が積極的に当該地域をアピールする場合、学校から新たな訪問先の問合せを受けた場合両方において、こうした情報が一元的に整理された資料があれば、旅行代理店の知識の向上と早期の対応（素早い学校への提案）、学校側へ具体的提案に結びつけるためのツールとなると考える。

今回のモニターツアーで訪問した北方領土学習および自然体験学習を中心としたコースおよびプログラムは、修学旅行のみならず、子どもの小中学校等への受験等を考える親が子どもと共に学ぶ学習旅行としての魅力があるとともに、こうした学習旅行は親の関心も高まっているとの指摘が検討委員会の委員から示されている。このため、北方領土隣接地域にある北方領土学習や自然体験などの学習素材を活用して、例えば、子どもの夏休みの自由研究向けの学習旅行を旅行代理店と連携して新たに造成し、展開することも考えられる。さらには、すでに北方領土隣接地域の学習素材を活用した学習旅行等を取り入れた大学の歴史系研究室のゼミ旅行等もあることから、旅行代理店と連携して、積極的に誘致すべきと考える。

5-2 調査を通じた課題と今後の展開の方向性

以下に、過年度調査で提示された具体的課題、その課題に対し今年度調査により確認できた事項、今後に向けた提案（全体的な方向性）を整理した。

5-2-1 重視すべき誘致対象の明確化と重点的な誘致活動

(1) 過年度調査で提示された具体例

過年度調査において、修学旅行のみならず大人数で同じ内容の参加・体験型学習を実施することが困難な状況であることが指摘されている。

- 来訪可能性が高いと見込まれる誘致対象の洗い出し
- 姉妹都市交流、友好都市交流など北方領土隣接地域市町の交流実績の活用
- 北方領土元島民の人的繋がりへの活用

(2) 今年度調査により確認できた事項

- 私立学校は、予算的にも本地域への来訪可能性が高い。特に大学の附属中学校・高等学校、中高一環校などの独自色を前面に出している学校は興味を示す割合が高い。
- モニターツアーの実施により代理店および学校の先生が実際に北方領土隣接地域を訪

問した結果、受入可能人数が多い施設（北方四島交流センターなど）や当地ならではの体験施設（羅臼漁港など）は来訪希望が高かった。ただし、収容人数は1施設あたり1～2クラス程度が中心となっていることが問題点としてあげられた。

- 『姉妹都市交流、友好都市交流など北方領土隣接地域市町の交流実績の活用』『北方領土元島民の人的繋がり活用』は、今回モニターツアーへの勧誘時の学校の先生の反応を見ると、実際に北方領土に行った経験がある先生や北方領土問題に関心がある先生などは、積極的な参加意思が見られた。このように、何らかの繋がりのある学校や教員へのアプローチにより修学旅行誘致の可能性は高いと思われる。

(3) 今後に向けた提案

- 私立学校、大学の付属中学校・高等学校、中高一環校などの独自色を前面に出している学校に対し、個別に継続的に誘致活動を実施することが必要である。2～3年先を想定し、修学旅行を検討し始める2～3月に学校側にアクセスすることが効率的・効果的であると考えられる。
- 標津サーモン館、四島交流センターはモニターツアーのアンケートでも収容人数・展示内容など満足度が高いことから、これらの施設が誘致における中心的な施設に位置づけられる
- 展示物の充実と手洗の数の確保は、特に学校側からの指摘が強い。こうした修学旅行として求められる基本インフラの充実は必要である
- 修学旅行ではなく、校長会や学校の教員向けの研修ツアー造成も誘致活動の1つとして想定できる

5-2-2 重視すべき誘致対象のニーズに即した参加・体験型学習プログラムの充実

(1) 過年度調査で提示された具体例

- 主体的な学びが可能な現地での学習プログラムの拡充
- 学習成果や自らの意見を発表することができる事後学習機会の提供
- 地元の生徒を対象とした取組み
- 講話や事前学習など移動中のバス車内での学習プログラムの提供

(2) 今年度調査により確認できた事項

- 現地での体験学習は学校側のニーズが高い。その際の指摘事項として一定規模の学校で対応実現性を不安視する意見が多くあがった。
- 地元の生徒との交流を望む意見が多くあがった。知床いぶき樽は鑑賞のみならず、体験・演奏する生徒との交流の可能性も望まれている。
- バス車内でのDVD鑑賞は概ね好評であったが、その内容をバス車内で鑑賞するように編集・制作する必要があるとの指摘もあがった。

(3) 今後に向けた提案

- 一定規模の学校（例：200～300名）を想定した場合に、隣接する施設を複合的に活用し、どのようにローテーションさせるかを具体的に検討し、行程案として誘致する活動が必要。
- 移動時間の長さを鑑み、バス車内で鑑賞することを想定したDVDの編集・制作は有効な手段の1つと考えられる。

5-2-3 地域における修学旅行の受入体制の整備

(1) 過年度調査で提示された具体例

- 分泊、民泊の受入に向けた体制の構築
- 取材学習などの地域社会の参加・体験型学習への協力体制の構築
- 語り部の維持・継承に係る人材の育成

(2) 今年度調査により確認できた事項

- 分泊、民泊は、旅行代理店は現在の潮流であるとの認識が高いが、学校側は概ね半分は肯定的、半分は否定的であった。
- 今回訪問した自治体関係者、施設関係者は非常に協力的であり、試行錯誤しながら受入体制を構築しつつあるため、旅行代理店と学校を巻き込み、望ましい体制を構築していくことは可能であると考えられる。
- 語り部の質の向上が必要であるとの指摘がある。また、語り部は1世である必要は必ずしもなく、2世・3世でも良いのではとの意見もあることから、継承の視点が今後は重要であると思われる。

(3) 今後に向けた提案

- 分泊、民泊については、受入体制の構築、具体的な規模・提供内容などを整理し情報発信することが必要である。
- これまで実施してきた出前講座での反応・質問などを整理・精査し、興味ある内容に対応したストーリー展開・内容など語り部の質の向上、2世・3世から見た北方領土問題など、新たなプログラムを構築する必要がある。

5-2-4 取組みの総合的な推進体制の確立

(1) 過年度調査で提示された具体例

過年度調査において、北方領土隣接地域の受入体制について、ある程度の体制を構築している自治体もあれば、未整備の自治体もあり、北方領土隣接地域内でも体制面に温度差

があることが指摘されている。

- 北方領土隣接地域の幅広い関係主体の連携・協力が不可欠

(2) 今年度調査により確認できた事項

- 今回はモニターツアーということもあり、訪問した施設では内容が重複していた場合もあったが、施設等を回ることにより順序よく理解できるようなプログラム・行程が望まれていた。

(3) 今後に向けた提案

- 地域全体で役割分担し、一体感・連続感をもったプログラムとする必要がある。
例：『北方領土の歴史を学習（座学）⇒ 陸から北方領土を望む⇒ 漁業操業の問題などを聞く⇒ 海上から北方領土を望む⇒ 語り部の話を聞く⇒ 地元の学生とディスカッションを実施する』などを1市4町で役割分担しながら実施する。
- 現在の誘致活動に向けたパンフレット等は自治体別に作成されている。北隣協が作成している総合パンフレットもあるが、全ての情報が網羅されている訳ではない。北方領土隣接地域として誘致するためには、1冊で全地域の情報が盛り込まれたパンフレットがあると誘致活動が容易になるものとする。
- また、上記の資料は旅行代理店に提供することも可能であるため、この資料を通じた旅行代理店から学校への展開も期待できる。

5-3 モニターツアーで訪問した施設の課題と誘致に向けた改善点

5-3-1 羅臼港漁協施設（昆布倉庫）

①施設の概要

羅臼港に隣接する昆布倉庫。倉庫内には大量の昆布が保管されている。

見学可能時間 9:00～16:00。所要時間 30 分程度。1 組 40 名程度。



②モニターツアー実施で得られた課題

昆布の生態系などの説明について倉庫内で実施するとした場合、説明時間や説明方法などで工夫が必要になると考えられる。倉庫内で立ったまま説明を聞くことを想定すると、最大でも10分程度までの長さとし、後ろまで見えるパネルを用意する、声が聞こえるようにハンドスピーカーを利用するなどの対応が必要になる。

また、保管されている昆布に触れないようにするなど、衛生面等の管理も必要になる。

さらに、体験学習の実施の要望もあり、修学旅行規模での対応可能性を検討する必要がある。

③誘致に向けた改善点

- ・後ろからも見える大きさの説明用パネルの作成（生態系、昆布漁、加工方法、品質管理についてなど）とハンドスピーカーの利用
- ・説明方法の工夫（小学生向け、中学生向け、高校生向け、一般向けなど）
- ・保管されている昆布の衛生管理（昆布に触れさせない工夫）
- ・体験学習の場の提供（昆布倉庫内または町内施設にて）

(2) 羅臼ビジターセンター

①施設の概要

知床の自然・歴史・文化などについての展示・解説。本物のシャチの骨格標本あり。収容人数は100名程度。見学の所用時間は約1時間。約20分のビデオ上映あり（約50名）



②モニターツアー実施で得られた課題

施設そのものについては満足度が高い。最大収容人数は100名であるが、修学旅行を想定した場合は、1クラス（40名程度）が実質的な収容人数と考える。そのため、羅臼町の